



るが、結局入らないで千日前へ行く。

題は「めし」だけだと、めし屋へ入ったりする場面はない。

それでもこの小説には、いま読んで面白い点が「新世界のことだけでも」いくつもある。

まず、当時（昭和二十六年）は通天閣がなかった、ということ。

通天閣は明治四十五年に開業したのだが、戦争中の昭和十八年、スクラップとして豊に献納することになり解体された。戦争に負けてから、再建されたのは昭和三十一年。それでこの小説では、昔は通天閣があった——と書くしかなかったわけだ。

二番目には、テント裏りのストリップ小屋があったこと。これは通天閣下の西側、いまモーターフェールになってるあたりに、常設されていたと思う。私の記憶に残ってるから十年ぐらい前まではあったはずだ。もっともテ

を少し出しておくことにしよう。

石浜恒夫という小説家が住吉の方にいる。

ヨットに乗ったりヒマラヤに登ったり、そんなことの方で有名だ。また「こいさん こいさん 女であることは……」とフランク永井が作った流行歌「こいさんのラスコール」なんかの作詞でも知られている。

そんな石浜恒夫が、林芙美子をジャンジャン町に案内したり、小説のなかの大坂井を教えたりのバツラだ。石浜本人がどう書いてる。

何にしても、林芙美子の小説は題こそ「めし」だが、めしのことには出てこない、という点であんまり面白くない。

「めし」は新潮文庫などにあるのでサラでも二百円以下で買えるはず。

ント張りよりはマシな、仮説のコヤになっていた。

三番め、林芙美子がジャンジャン町を歩いて、ほんとに「めし」の看板にドンゲキしたとすれば、それはどこだったかと考えてみるのも面白くないだろうか。

昭和二十年代、ジャンジャン町にどんなめし屋があったか、土地の人に聞いてみると、突き当りの「きん屋」はもちろんあった、あれは古い店ですよ、という。しかし、他の店については、三軒ぐらいあったかも——の程度で、店名まではおぼえていない。

交番の近くに、天夜郎専門でめしを食わせる「京屋」があるが、いつごろの開店か、届にたすねればわかることだけど、そこまでは私も調べなかった。

さて、林芙美子の「めし」についていろいろ書いてきたが、その伝説ではなくて実証を

## (2) 武田麟太郎の「金と山」とサナがゆ

武田リン太郎という小説家は日本橋東一丁目の生れで、今宮中学（いまの今宮高校）を卒業した。戦後すぐに死んだが、生きていれば七十一歳になる。はなやかに活躍した小説家だった。

「金と山」は、そのはなやかさが、まだひろまかけの頃、昭和八年の小説で、ひとりの小説家がある夜産け橋へやってきて、一夜を過ごす体験が書いてある。

この小説のことは、産の歴史を語る場合、よく引き合いに出されるから、知っている人も多いと思う。

そこらにコロカッテルような、底の浅い笠ヶ崎小説と味がちがうのは、作者自身が子供のときからこの町を知っていて、しかも公式

的でない深みのある左翼思想、というよりは人間の持ち味で、下積み生活者に寄り添うところが多かつたせいだろう。

「釜ヶ崎」のなかには男娼やら飲んだくれやらが登場して、外采者にすぎない小説家！作者と、かりそめのかかわりを持つ。それは冷静に描かれていて、決して同情的ではない。突き放している。とみることもできる。

だがその突き放し方は、ワイベツとはちがって、むしろ悲しさとかさびしさとかに根のある突き放しだ。

理クツはやめとこう。

小説はこんなふうに進むのだ。

——釜ヶ崎へやっってきた小説家は、一軒の家の前で、そこが自分の生れた家で、壁に残っている落書きも自分のしたものであることを確認する。その夜はいま、夜の女たちのカセギ探なのだ。小説家はそこで一人の女の客になつて部屋にあがる。女は、実は女装した男娼で、小説家は五十銭払つて何もせず、二

いてる、餅入小豆がユーフ呉れと、壁に張つた紙ぎれを讀んで云うのであつた。

オカユをいフも売つてる店は、現在では「かどや」だけだろう。

ほかの店も頼んどしてくれないことはないが、かどやなら、腰かけにすわつてオカユといえはすぐ出てくる。大きな釜に作つてあるのは読者の方が知つてゐるはずだ。

しかしそのかどやでも、手がユなんてのはない。ましてアズキがユもない。白い普通のカユだけだ。このへんは、昔の方がいろいろあつたということになる。

シャバでは、というとするで釜がアタバコ、ムシヨのようで具合悪いが、市民社会では健康のためにムギメシなんていわれてるのに、釜では二軒あつたムギメシ屋が店じまいしてもう五、六年か、もつとなるか。

もう少し、小説をうつつしておこう。朝になつて、小説家が一人で眺めた露店の光景だ。

人で町を歩く。

兵隊屋、という名のとしよりが行きどめられて運はれるのに出会つたあと、二人はショーキー屋に入る。そこでは二日ものしを食つてないという、ボタンの一つもない外套にナワを巻きつけた男と話をする。

外套の男は、酒オゴレとはいえてもめし一杯頼むとはいえない、というが、小説家に向つては「あんたは、旦那やよ、てに、かめへん」と、めしをオゴレと頼む。そして男娼と三人、せまい道へ入つて行く。

あとは小説をうつつしてみる。

めさす店はまだ起きていた。

「手がユくれ、あつさん」と、外套は怒鳴つた。吹きながら、人々の手垢を黒くなり、壁りの剣かたハシで、煮込のようなカユをのどに通しながら——「なんやて、明日は十五日ニツキ、アズキがイニ銭モチ入アズキがイ三銭、よし来た、あつさん、今晚は旦那がフ

魚の骨や腰を、野菜の切れ屑などとしよに湯で煮込んだのやら——それは暖かそうに泡を立て、灰汁あじのようなものを鍋の表面に浮かせていたし、また、すし屋のゴミ箱から、集めて来たらしい、赤いシヨウガの色かどきつく突まつた種々雑多の形のくすれたすしやら——すべて、異臭を放ち、しかしその臭いが腐ましたちには誘惑である食べ物を一銭二銭で売つているのである。

こんな商売は、もちろんいまでは全く見られない。そういう意味で、釜ヶ崎は釜ヶ崎なりに進歩と変革があつたのだといえる。

だが——、そうなんだ。だが——ということなんだ。

「釜ヶ崎」は古本屋でも新本屋でもちよつとみつけにくい。どうしても読みたい人は編集委員会に八かきでも下さい。